徳之島における稲作と関連伝統芸能の復活の取り組み

内山　五織

１．はじめに

筆者が生まれ育ち、今も生活している徳之島[1]は九州から南へ400キロの距離に位置し、奄美群島に属する離島である。世界最長寿の人物を２名[2]輩出し、また合計特殊出生率[3]で日本一になるなど、長寿と子宝、そして自然に恵まれた島である。

ところが近年、この島の地域社会の有り様の変化が著しい。大きな要因は農業の機械化に伴う「ゆいわく」（相互共助の精神で行う共同作業）の機会の減少と、それに伴う住民同士のつながりの希薄化である。こうしたことから大都市と同様に、隣人や地域社会に関心の薄い住民が増えてきており、このことから来る弊害が起こってきている。また若い世代の島外流出にともない、地域の担い手の世代交代の展望も見えにくい。筆者はこうした地域社会の変化に危機感を感じたことから、本研究科ソーシャル・イノベーション研究コースに入学し、島内住民や行政の理解と協力を得ながら実践研究を進めている[4]。

島の子どもたちは高校を卒業した後は進学や就職等で島外に出ていく。彼らがもう一度島に戻り、島の担い手となるには徳之島での思い出や体験活動が不可欠であり、そのためには、地区に伝わる伝統行事を衰退させてはいけないこと、そして、子どもたちにそれを伝え、継承していかなければならないというのが筆者の信念である。そのために伝統行事の根本にある「稲作」をもう一度復活[5]させ、「ゆいわく」や伝統行事、音楽や舞踊などの伝統芸能を真の意味で再生したいと考えているのである。

２．事前準備

水田の土地は伊仙町役場職員であり所有者のM氏に依頼し、鹿浦川が土地の側面を流れている田んぼ作りには適した土地を借り受けることができた。しかし、その土地はサトウキビを植えていた土地であったため、筆者と友人２人で３日間かけて手作業で刈り取る作業を行ったのだが、まだ畑にはサトウキビの葉や根が植わっており、そのままでは田んぼにすることができない。しかも水を溜めるためのあぶし（畦）を作らなくてはならないため、大がかりな工事が必要となった。その工事は大型重機が必要なため、地元の土木業者に依頼し行った。田んぼが完成したのは依頼してから２週間後の３月23日のことであった。

筆者の当初の計画では、親子体験教室形式で伊仙町全体から参加者を集め、30名規模で開催する予定であったが、社会教育課のT氏との数

[1] 島内には鹿児島県大島郡徳之島町、伊仙町、天城町の3町があり人口はあわせて約27,000人。面積は約247.77km^2。
[2] 泉重千代氏（1865年（慶応元年）－1986年（昭和61年））、本郷かまと氏（1887年（明治20年）－ 2003年（平成15年））の２名。
[3] 一人の女性が一生に産む子供の数を示す。
[4] この実践については伊仙町社会教育課を通じ、「財団法人 地域創造」（http://www.jafra.or.jp/）が行う支援事業「地域伝統行事等保存事業」として事業費が組まれている。
[5] 徳之島ではもともと稲作が行われており、島の伝統芸能は稲作の豊作祈願や収穫感謝などに起源するものがほとんどであるが、17世紀以降の薩摩藩支配時代にサトウキビ栽培が強要された歴史や昭和30年代から始まった国の減反政策により、現在では水田はきわめて少なくなった。稲作と伝統芸能が密接不可分なものであることが、今回の実践の発端ともなった。
注：個人の名称は配慮してアルファベット表記とした。

回にわたる話し合いの結果、伊仙町のモデルケースとして一つの地区でやってみないかというアドバイスを頂いた。そこで候補として打診したのが伊仙町の西部にある木之香地区である。この地区は、筆者の出身地であり、稲作起源の伝統行事「むちたぼれ[6]」が今も残っている。

３月24日に木之香地区の区長K氏のご厚意で地区公民館にて説明会を行う運びとなり、10名近くが集まった。（図１）参加者の反応はたいへん好意的で特に伊仙町の議会議員であるN氏には「伊仙町の子どもたちにはこれから必要なことだ。ぜひ、木之香集落だけではない、他の集落の子どもたちにも声をかけてみたらどうか」というアドバイスを頂いた。また地区老人会会長のS氏は「昔の記憶がよみがえる。自分がやったことがあるものだから、教えてあげるよ」という言葉も頂いた。また、数日後の婦人会会議には15名の参加者があり、田植え当日の郷土食をメンバーの方々に用意をお願いしたのだが、これも快く了承していただいた。かくして地区への説明会は終了し、今日を境に田植えに向けて、本格的に動き出したのである。

図１　木之香集落での説明会（H氏撮影）

３．苗の準備

天城町在住の農家であるT氏は、この稲作が衰退した徳之島において、お米の大切さを訴え、徳之島において自給自足を実践している数少ない農業者である。今回の取り組みの中の農作業指導はT氏にお願いすることができ、苗床をお借りして２月の後半から稲を育てていた。

４月10日、成長した稲をはじめて集落民や子どもたちに見せる時が来た。苗床から田んぼとは20㎞も距離が離れているため、前日に集落の有志で取りに行くことになった。苗とりは、木之香老人会の中に２人の経験者がいたので指導をお願いした。総勢15名が参加し、大人も子どもも関係なく、初めての作業に携わった。まず、田んぼに入るということ自体初めてという参加者が多く、田んぼの泥に足を取られる子や、オタマジャクシをみて気持ち悪いという子など、様々であった。作業は難しく、苗を引き抜けば折れてしまうため、下のほうからすくいあげて取らなければならない。指導者の２人の手つきは驚くほど速く、これを見ていた小学２年生の女の子は「おじちゃんすごーい！！」と目をキラキラさせていた。その時の指導者の２人のいきいきとした表情は忘れられない。苦しかった苗とりの経験が、今や子どもたちに尊敬の目で見られることに誇りを感じているようにみえた。次にはそれを一束ずつ藁で束ねるという作業がある。簡単な作業なのだが、やってみると上手く束が持てなかったり、巻くたびに落としてしまったりと上手くいかない。特に子どもたちは手が小さいため、時間が大人の倍ほどかかってしまう。しかし筆者は時間がかかっても自分で巻いてほしいとお願いした。そうしなければ体験する意味がないと考えたのだ。最初は時間がかかっていた子どもたちも最後には自分で苗の束を作り、あれだけ嫌がっていたオタマジャクシも捕まえて観察していた。こうして、３時間かけて、うるち米の苗100束、もち米の苗35束を準備することが出来た[7]。

４．いよいよ田植えへ

４月11日、天気は晴れ。田んぼにはなんと老若男女100名以上が集まった。昔懐かしい田植

[6]「むちたぼれ」は「餅もらい」の意味で、徳之島内各地区で豊年祈願行事として十五夜の頃の稲の収穫または種付け時期に行われる。

[7] 今回はT氏が栽培している品種「ひとめぼれ」ともち米の「とみちから」を栽培することとした。

[8] 徳之島は稲作起源の伝統芸能がたくさん残っている地域であることは前述したが、その中でも一際希少なものが、田植え唄である。田植え唄は日本全国に残っているが、奄美群島では徳之島にのみ確認されている伝統芸能である。主に田植え時に早乙女と掛け合いで歌われ、苦しい田植えの作業の負担を軽くする慰めの唄として歌われていた。今回、稲作の復活により、この田植え唄の復活も同時にするという試みを町の「伝統芸能等保存事業」の一つとして行おうということになった。

えが見られるとあって口コミで高齢者たちが誘い合わせて参加があり、老人ホームからも見学者が訪れた。順調に田植えはすすみ(図２)、田植え唄[8]の撮影も行われた。途中木之香婦人会の用意したシューケ[9]を食べ（図３）、午後１時には田植え作業が無事に終了した。

参加した子どもたちのアンケートを見ると、「田植えは難しかったけど楽しかった」という子どもや、「来年も参加したい！」という声があり、多くの反響に驚いた。その後、木之香地区では農産物の収穫終了祝いが行われ、田植え唄に参加していただいた目手久民謡保存会のメンバーを招待した。その席で、目手久民謡保存会のK氏から「自分たちも木之香地区のように頑張らなければ」や「木之香集落と目手久集落で今後何かできないだろうか？」などと話をしてくれた。今回、各方面で、田植えによる意識の変化が感じ取れた。それは木之香地区自体にも及んでおり、地区住民の一人は「地区の人たちと一緒に、久しぶりに懐かしい田植えをしたおかげで、やっぱりこういうことは必要なことなんだと思った」という感想を頂けた。

５．おわりに

今回の田植えでは、木之香集落が中心となって子どもに田植えの体験をさせることで伝統行事「むちたぼれ」の元であるお米への関心を寄せることができた。また、自分たちで田植えをすることで、お米を大切にしようとする心をもったり、お米を作るための苦労を知ったりと、食育としての効力も得ることができたように思う。また、子どもたちに田植えを教える高齢者の姿は普段の生活では見られないほど生き生きとしていた。それ以外にも、高齢者が昔懐かしい田植えの風景を見ることで若い頃の思い出がよみがえり、目をキラキラさせてはしゃぐ姿もみられた。これにより、農村によく見られた「ゆいわく」を実践すると、子どもたちだけでなく、高齢者がイキイキと活躍する姿もみられ、一人ひとりが輝ける、一人ひとりが役割をもった集落になれるのではないかという期待感が高まった。あらためて、また今後も続く作業にもそれぞれがその役割を発揮できるように、また秋の「むちたぼれ」まで順調に運ぶよう、この実践を進めていきたい。

図２　田植えの様子（M氏撮影）

図３　葉っぱで包んだおにぎり（M氏撮影）

[9] シューケとは徳之島の方言で軽食の事。おかずなどの総称。